

季弘大叔と琵琶法師の交流をめぐる——海会寺という《場》がつかぬ学問——

愛媛大学法文学部 田中 尚子

はじめに

・季弘大叔

室町時代の僧侶。別号、蔗庵・蔗軒・竹谷。備前の人。応永二十八年（一四三）八月二十五日に生まれ、長享元年（一四七）八月七日に没、六十七歳。【事蹟】幼くして備前願心寺で出家した。永享五年（一四三）同郷のよしみで東福寺護福庵の竹庵大縁に参じ、その法を嗣いだ。のち信仲以篤・月泉祥洵・雲章一慶・勝剛長柔らに参じ、文明六年（一四四）東福寺の首座となり、ついで真如寺の公帖を受けた。同十二年四月東福寺に住したが、冬退院し、寺内の菩提院・莊嚴藏院に住した。同十五年十一月堺の海会寺に住し、翌年五月南禅寺の公帖を受けた。文筆にすぐれ、当時の五山文学僧たちと親しく交わったが、異常なまでの観音信仰と浄土思想の持主であった。日記『蔗軒日録』三卷、文集『蔗庵遺稿』一卷、観音霊驗集『続感異集』などがある。（『日本古典文学大辞典』）

・『蔗軒日録』

三卷三冊。日記。季弘大叔著。「蔗軒」は季弘の別号。記事は文明十六年（一四四）四月一日から同十八年十二月三十日に至る。【内容】季弘の堺在住期の記述に成る。病弱で南禅寺公帖を受けながら入院できなかったように、医療に関する記事が多く、また禅学のほかに、観音・浄土・神社信仰など雑修的傾向がうかがわれる記事が少なくない。また堺という土地柄から、日明貿易に従った金子西という人物との交友とそこで得た中国の風俗・言語に関する記事、堺の豪商との交渉を示す記事がある。さらに保元・平治の乱、源平の合戦、幕府、摂関家の事蹟、歌道の故事など、国史に深い関心を寄せ、琵琶法師からそれらの知識を摂取する記事がある。書画鑑賞に関する記事も多くみえ、とくに雪舟についての記事は興味深い。なお文明十七年条に、回復おぼつかない病身の没後のために遺書を旧知に分つべく蔵書の処分目録を作る記事がみえるなど、時代の代表的知識人の一人でもあった禅僧の私生活をうかがうことのできる貴重な史料である。（『日本古典文学大辞典』）

一、『蔗軒日録』に登場する人々

(1) 先行研究での位置づけ

▽梶原正昭『平家物語』と芸能―室町・戦国時代の琵琶法師とその芸能活動―（あなたが読む平家物語5）

『平家語り 伝統と形態』有精堂出版 一九四・九

▽久保尾俊郎「琵琶法師の知識―季弘大叔『蔗軒日録』を読む」（古典遺産 64 二〇二・五）

「中世堺の読書―季弘大叔『蔗軒日録』の場合」（古典遺産 65 二〇二・六）

『蔗軒日録』の書物移動」（古典遺産 69 二〇二・五）

『蔗軒日録』の書物目録」（古典遺産 71 二〇三・八）

▽川本慎自「高精細カラー画像で中世人の「声」を聞く―『蔗軒日録』の世界から」（八木書店コラム

<https://company.books-yagi.co.jp/archives/7293> 二〇二二・五）

短い期間の日記ではあるが、季弘はこの間さまざまな人との交流を持っている。なかでも頻繁に海会寺を訪れて季弘の関心を引いた者が3人いる。琵琶法師の城菊・宗住と、還俗した元禅僧の金子西である。これら3人から耳にする話は、禅僧の普段の生活では触れることのない目新しいものであったと思しく、季弘は彼らが訪れるたびに詳細に日記に書き留めている。

▽源健一郎「いくさ語りと禅僧―『蔗軒日録』を通じて―」（同志社国文学 101 二〇二四・二）

いくさ語りを書き留めようとする季弘の態度として特徴的なのは、その詳細さである。（中略）『蔗軒』には語りの記録以外にも、贅者の往来や滞在等の事実を書き付けただけの簡略な記述が散見される。季弘にとっていくさ語りがいかに日常的なものであったかを表している。季弘にとって贅者は、いわゆる御伽衆的役割を果たしていたと言ってもよい。

▽拙稿『蕉軒日録』小考―季弘大叔の学問事情―(愛媛大学法文学部日本文学研究室ウェブエッセイ
<http://ilab.l1.chime-u.ac.jp/essay/> 二〇一四・三・三)
『蕉軒日録』と『碧山日録』が記録する乱世―五山僧の学問事情の一齣として―(『いくさと物語
の中世 第二集』汲古書院 二〇一五・八)

(2) 禅林の学びの状況

1 文明十八年正月十日条

午前印銷翁提小銀餅而至、即煮胡餅而進之、小酌、午後入浴、予分湯而浴、氣力生矣、話及自後鳥羽
至今上之履歷相紹之次第、(後土御門天皇)今山林之徒不染指于(宋)朝之事、何心哉、

2 文明十八年二月七日条

本居士再至、曠首座談話之次、説云、当所之人(つゝ) 昨日六日、自九州平戸而至、妙解唐裡之語音、入唐之
諸僧不知文字、受唐人之誚者不少矣云々、

(3) 瞽者・琵琶法師への言及(城菊・宗住)

① 城菊

・文明十七年二月三日条

城菊勾頭至、和州人、大利根(こゝろ) 本朝王代事跡語之如流、年廿九歳、北庄(しやう) 養老母、孝心勝、
具眼目之人也、

② 宗住

・文明十七年正月七日条

是日瞽者宗住至、医師廣瀬翁至、話移時、宗住古今神代事跡、莫不該通、

▽梶原正昭『平家物語』と芸能―室町・戦国時代の琵琶法師とその芸能活動―

五山の学僧で泉州堺の海会寺に退隠して、季弘大叔が目を懸けていた琵琶法師で、(乗菊)とも表記される。文明
十七年(一四八五)二月三日に始めて海会寺を訪れた時、廿九歳ということなので、応永卅三年(一四二六)の生まれ
ということになる。和州の出身で、孝心あつく堺の北の庄に老母を養っているとのことだが、きわめて博識の者でこと
に本朝王代の事跡に精通しており、その弁舌は流れるがごとくであったといい、大叔はその来訪のたびごとに「平家」
の語りはそちのけでさまざまなことを尋ね、その対話を楽しんでいる。(中略)

この社会に入りする盲目芸能者の中には博識の者が少なくなく、たとえば城菊と前後して『蕉軒日録』に登場する
宗住という瞽者のごときは、「平家」はもとより「古今神代之事跡、莫不該通」という人物で、併せて陰陽の学にも
通じているとされるたいへんな物知りであったという。その談話の範囲は、『平家物語』の作者や成立の問題から始ま
って、日本史の知識や社寺の縁起から姓氏・家系、そして有職・故実のこと、さらには陰陽道や天文にまでおよんでお
り、その博学ぶりに驚かされるが、それをいちいち克明に書きとどめている筆録者の関心のありかたも注目されるとこ
ろであろう。

二、琵琶法師の活動

(1) 年表から見る活動状況 ↓別紙参照

① 琵琶法師が語る内容

・「平家」語り(↓表内ゴシック)

語りの評価 城三不妙(文明十六年十月一日、文明十七年四月二日、文明十八年十月四日)

・軍記関連（↓表内丸ゴシック）

文明十七年閏三月十二日条

宗住至、平話、由為居士至、住神劍アマノ村雲云々、書京師繼上主所求之画詩、草ナキノ劍云々、平家第十一終、…宗住宿、夜間心地不煩、

・同時代の情報

文明十八年六月十八日条

宗住至、大將拝賀、建武後、宣篋從車五百兩、鹿苑三百兩、人皆嘆之、普广二百五十兩、今東山殿八十兩、只今有三兩、落地之甚如此、数年之後、奈何々々、嘆猶有余、宗住話之、宗住赴放參之約於村中、

▽拙稿『蕉軒日録』と『碧山日録』が記録する乱世―五山僧の学問事情の一齣として―

彼らにとっての学問は自身のためだけではなく、後の世に受け渡すという思いがあった。だからこそ、過去に照らして今を見、そしてその今を記録して、次の世に託すのだ。乱世ではその思いはより大きくなるのであって、軍記が系譜で意識されるのもその思いのともなされた行為だったと考えられる。

②重ならない来訪

1 文明十七年四月七日条

城菊至、話而去、宗住至宿、

2 文明十七年四月十一日条

宗住早旦歸于住吉、此日薰上主遣于正覚、問神三公之歎樂、城筭至宿、心地不好、以天陰也、

3 文明十七年十月十八日条

群一座頭至、与一飯、自京師源五老父至、十一月旦、充上堂禪客、諸状至、宗住至、湯腰、

(2) 宗住と金子西の交流

① 金子西

・文明十八年正月十二日条

宗悦書記在東山之天潤庵、後作俗、癸卯入大明、去冬歸泉南、唐人字日子西、名金也、是日問予而至、話及唐裏之事、餅■（缶十單）、定州今其地絶矣、

② 宗住と金子西の対面

1 文明十八年六月四日条

コマノハナムケスル時ヨム也、阿部仲九在唐明州、見月賦此歌、（中略）此日宗住・子西同席話、本居士至、左手一穴、灸二十一壮、左足一穴、灸五十壮、七々壮也、心地好、

2 文明十八年六月五日条

宝住至、静処居士至、子西至、宗住演史、新兵衛使堀口至、告子西乗舟急可赴西州、則以之告子西云、

3 文明十八年六月十九日条

今日乃土用之中日也、(中略)宗住説之、長寿侍者至、求題、題目、陸羽泉、子西至、話及江南、

4 文明十八年七月九日条

宗住至、子西云、日本ノ官人ヲハ五員十人トカク也、人件等ヲハ五名十名ト書也、枕子拿来、茶拿来、笔拿来、イツレモ拿来ハモツテコヨト云意也、

5 文明十八年七月十三日条

宗住至、唐衣裳ヲキテ来、似合タリ、(中略)宗住云、午時一衆赴向上之水陸云々、天イハ南(六十六)子禍害ワルイ方ウシトテ絶命ワルシ、東絶体、西遊年、作事ニキラウ方也、是日葉屋五郎次郎送以北絹一端(也黄)・大茶碗皿二十個、子西云、你的強盗人、冒人之言、日本豪盜ト云心ナリ、銀、曉得、不曉得、唐ニハ絹子ノミ、北ノ字不加、

6 文明十八年十月十日条

子西・蹟首座皆至、大明人詩集画竹空谷泉等手而至、觀而頗慰懷矣、宗住至云、凡人一能一芸有所長者ニハ、ナノリヲ訓ニヨマス、公卿モ大臣ノ後ハナノリヲ不申、ヲソレ也、(中略)句法定ル、貫首トハ殿土人ノカシラ也、カシハ原トハ桓武ノ事、布衣ハ六位也、布テシトクサイロ、殿モンツカサトハ、庭燎ヲツカサトル人、子西至、及唐話、

cf 金子西と清一

・文明十八年七月二十八日条

寿向侍者至、忍上人至、手医書至、無工夫有工夫、日本有隙無隙、至西至、(能カ) (||言十念)瞽人清一至、備人平原尼状至、引合二帖、

三、和歌への関心

(1) 定家への言及

1 文明十八年四月五日条

実頼ノ歌云、ハコネ山ワカコヘクレハ水ノウミノヲキノコシマニ波ノ夜ルミユ、貞家柿下ノ後ハアルマイト云、貞家ハ後鳥羽ノ朝ノ人、後トハモ歌道ノ達者、後トハ四歳ニテ即位、後ニ隱岐ノ院ト申ス、後トハ一院ト云、ツチ御門ヲ新院ト云、此時当帝ハ順徳也、物ノ、夫ノ矢ナイツクロウユテノ上ニ、アラレタハシル那須ノシノ原、此二首之歌ハサネトモ絶作也、万葉様ノ歌ト云々、
↓箱根路をわがこえくれば伊豆の海やおきの小島に波の寄るみゆ (『金槐和歌集』卷之下 雑部)
↓もののふの矢なみつくろふ小手の上に霞たばしる那須の篠原 (『金槐和歌集』卷之上 冬部)

2 文明十七年七月十八日以降の記事

サネトモノ歌曰、ハコネ山ワガコヘクレハ水ノ海ノヲキフシマニ波ノヨルミユ、貞家曰、柿下ノ後ハアルマイトホメラレタ、後鳥羽院時人、歌道達者、兵家落時即位也、一院後トハ、ツチ御門ヲ新院ト申、順徳、(以下四字即位ノ補書ノ擬入カ) 四歳ニテ、(以下九字兵家云々ノアトニ統クカ) 後ニオキノインアリ、

3 文明十八年四月一日条

以下城菊至、談云、大将拜賀、東山殿八十五両、今之小府君四十余両云々（中略）物ノ夫ノヤナミツクロウユテノ上ヘニアラレタバシナルナスノシノ原、貞家曰、サネトモノ歌ヲアンスレハ、心氣ヲコルト云也、京・鎌倉ノ間ニ音信不絶云々、サネトモハ南山宣ノ再誕云々、

4 文明十七年十月十六日条

城菊至、予問本朝ノカナツカイト云事ヲ、答曰、昔物ノ、ヘノ吉名ト云者、無同字、歌曰、世ノウキメミヘヌ山地ヘイラムニハヲモウ人コソホタシナリケレ、集ハ古今、延喜ノ比撰、于今六百年ニ近也、家以後ハ都鄙流布スル也、貞雅・俊成ノ時、ソレカトモ不流布、暖腰、夜間不、有神効也、東福開山宿忌、明如白日思出耳、

5 文明十八年四月四日条

招月正徹、七十九歳逝、正廣、今年七十五、正璠、今年五十四、俊成ハ御堂関白・ミユヒタリノ後裔、冷泉・二条両家相分、冷泉為正伝、大織冠ハ官名ナリ、鎌足大臣、天智朝イルカノ大臣誅セムタメ、於藤下談合、誓曰、事成則以藤為氏云々、成与為氏也、内大臣ハ権宮也、サネトモノ歌、貞家美之甚、此柿下、定家之子、其道ハ得之、不得其妙、定家時違勅命、父俊成献表、以故睿情如初云々、道長法成寺ノ関白ト云、南江、七十七卒、此日終日蒙然、

6 文明十八年八月十七日条

晴雲云、君ノタメ龍ノサ、クル珠ヤコレモ中ニウカフ秋ノ夜ノ月、敷嶋ヤ此道サシテシル事ハ天上天下唯我独尊、招月ノ定家贊也、アスカ井トノハ雅経之孫、冷泉トノハ定家ノ末、（中略）後鳥羽ノ朝ノ時、通具・定家・家立・有家・雅経五人撰新古今、不足于二千首、序云、二千首、同時、有慈鎮、後京極時ニ摂政也、定家・々立ハ歌作、慈鎮・西行ハ可読、時之諺也、雲外雁、日野殿ニテ、ヲロカナル風ノツカイカ行、雲ノソテヨリ落ル雁ノタマツサ、心ナラスハナル、恋、ヲモイツツ浪ノ岩ノアハイガ井、ノ手ニトル中トナリスル、三百六十番、七百二十首、晴雲歌集、今尚自集云々、アスカイノ家ヲ倭歌ノ家ト号、右ノ倭談ハ禅穩入道至説予、

↓敷島や此道さしてしることは天上天下唯我独尊（『草根集』卷十）

▽源健一郎「いくさ語りと禅僧——『庶軒日録』を通じて——」

⑭a（＝文明十八年四月四日条 ※発表者注、以下同）で語られる正徹について注目しておきたい。周知の通り、正徹は東福寺の書記を務めた禅僧であり、著名な歌人であった。和歌を冷泉為尹に師事し、能登守護畠山義忠に庇護された。義忠は、本家の従兄持国の家督争いにおいて、その子義就を支援していたが、義就は季弘の庇護者でもあった。実は城菊は能登に下って、その義就に面識を得ており（⑭a＝文明十八年五月十三日条）、能登から帰ったことを季弘に報告しに参じた折には、ふたたび正徹の和歌を取り上げてもいる（⑰a＝文明十八年九月二十三日条）。⑰aの語りについては、当代的な権力関係が背景にあることが窺われる。以上のように概観すると、『庶軒』に見られる和歌の話題は、文芸面への積極的な活用が想定された『抜尤』（＝『臥雲日件録抜尤』※発表者注）と比べると付随的な位置づけにあるように思われる。季弘の興味は和歌そのものよりもいくさ語りや歴史語りの方にあり、宗住や琵琶法師城菊はその知的関心に合わせて、話題を提供していたことになろう。

・正徹

備中国小田郡の小田氏の出自とされるが未詳。俗名、正清または信清。稚児名として尊命丸。正徹は出家後の法諱で、道号は清嚴、徹書記とも称す。庵を招月庵または松月庵と名付け庵号とする。永徳元1381年生まれ。長祿三1429年

五月九日没、七九歳（草根集他）。（中略）【歌風・影響】正徹ははつきりとしたイメージを持った歌人である。『正徹物語』においても、冒頭の「この道にて定家をなみせん輩は、冥加もあるべからず。罰をかうむるべき事也」と、定家の崇拜者・後継者としての立場を鮮明にしている。定家からの影響は様々な局面に及ぶが、最も重視したのは、難解さを厭わず、言葉による構成で、観念的とも言える現実世界から飛躍した世界を構築する方法であった。一般の言葉では解説不能な特異な雰囲気醸し出す作風であり、その実現した詩的な余剰を「幽玄」という言葉で呼んだ。

（『和歌文学大辞典』）

(2)その他の和歌全例

年月日	和歌	備考（出典等）
17・4・8	ナカソラニナスナヨ富士ノイウ烟タツ名ニカヘテ思フ我身ヲ 見スハイカテ思イ合センコトノハモ及ハヌ富士トカネテ聞シヲ 路ノクノアコヤノ松ニコカクレテ出ヘキ月ノ出モヤラヌカ	宗住曰…普賢院殿富士ノ歌 〃 〔平家・阿古屋の松？〕 城羽至…〔 定利義時 勝定院云
17・9・18	七ソチニ三ソチヲ添テ君トワレイサ百トセヲトモニタモタム	和田・万代・上神 紹芳連歌云 述懐歌云 賦夢之一字 〔太平記？後醍醐詠〕
17・10・24	ナカタチニヤマクモサフヘホト、キス チリニケリ是ヤヒトイノワモミチミツノヲト ムクイアリテカ、ル世ニメ アマレ逢フ身ヲコソノケ 世ヲハウ ラミシ ミルトノミ何トテ人ノサタムランユメニワ者ヲ、カヌ者カワ	宗住云 〔太平記？〕 宗住…至…土岐頼実曾有歌曰 〔後拾遺和歌集〕 コモノハナムケスル時ヨム也…此日 宗住・子西同席話 〔阿倍仲麻呂〕 帰田集、一遍上人 〃 古今ノ歌 〔古今和歌集〕 近代ノ歌 〔新古今和歌集・西行〕 一休 ムラサキ式部／〔小野小町伝承〕 山家鳥 ハジメテヲフコイ 冬、月 寒芦 詰公／〔正徹・草根集〕 宗住至…実貞、歌道雅頼 公盛 ノ歌 〔新古今和歌集・実定〕 内歌人晴雲云、題歌於便面、
18・3・11	サシテ エクサカキノ山ヲ出シヨリ 雨カ下ニハカクレカモナシ	
18・4・27	マサ門トハ米カミヨリソキラレケル田原藤太力謀	
18・5・1	木ノ葉ナル窓ハキ、ワクカタソナキ時雨スル夜ニ 時雨セヌ夜モ	
18・6・4	天原フリサケミレハ春日ナルミカサノ山ニイテシ月 カモ	
18・7・9	仏トハナニヲイハマノ苔ムシロ南無阿弥陀仏ニシクモノソナキ ヲモウコトナクテスキニシムカシサヘシノヘハイマノナケキトソナル	
18・7・10	ノコリナクケルソメテタキサクラ花アリテ世ノ中ハテノウケレハ キリくス夜サムニ秋ノナルマ、ニヨハルカコヘノ遠サカリユク	
18・7・17	名ニシホフ熟柿クサ、ヨ墙ノモトニ人丸ナカラ面ハ赤人	
18・8・1	南無薬師衆病悉除ノ願ナラハ身ヨリ仏ノ名コソヲシケレ	
18・9・23	イヲチカクコマトリナキテクツワムシナヲモウキ世ヲヲモヒ クラキ夜ニタレトモシラテキヌソテヒケハヒカレテイノリヲハセス サヘアカヌヒカリノツモル月ナラハユノアシ原ヤ雪ノ白山	
18・10・10	ナニワツニヲフルノミカワヲシナヘテトヨアシ原ハ冬カレニケリ 花ミテハイト、イヘチノイソカレヌマツントヲモウ人シナケレハ	
18・12・29	アシノ葉ヲナニト分テカサクヤコノ花ヲウラナルコノ里人	

※備考内「」部分は発表者による注記。

おわりに

使用テキスト

『蔗軒日録』→大日本古記録（岩波書店）、尊経閣善本影印集成76『蔗軒日録・盲叢記』（八木書店）

※用字を通行の字体に改めた箇所がある。また傍記等の一部を省略している。

〔附記〕本研究はJSPS 科研費 23K00277「室町期の学者による中国史書研究の様相―二十一史享受に窺える自国の歴史認識の変遷―」の助成を受けたものである。

『蕉軒日録』が記録する琵琶法師の活動状況

日時	宗 住	城 菊	それ以外の人物
文明16年			
4・9			替者城三至
4・12			替者城三辞去
10・1			城三替者至宿 平家二句、不妙
10・15	本居士与宗住同至（五撰家）		弥一座頭快談：弥一宿
12・13			
文明17年			
1・7	替者宗住至、医師廣瀬翁至（古今神代王代事蹟）	城菊勾当至（本朝王代事跡）	
2・3		（四部之合戦書、信西・崇徳院）城菊勾当至	
2・7	宗住至、演習史者三條、高梵大塔・木曾合戦・大口著縛		
3・5	宗住至宿、演史		
3・6	宗住赴村齊室、住歸于慈恩（平家流布本は玄惠改		
3・7	宗住赴村齊室、住歸于慈恩（平家流布本は玄惠改		
3・18	宗住手住吉大方殿所賜書而至宿、夜話		
3・19	宗住在座、宗住陰陽之学：宗住宿		
3・22	宗住宿		
3・23	住終日為予平家物語、如常之談論		
3・24	宗住宿		
3・25	宗住歸住吉		
閏3・12	宗住至、平話：平家第十一終		
閏3・13	宗住赴村齊、宗住宿、是日平家一部終、夜雨、所謂宗論替者秘密、為予語之		
閏3・14	宗住赴北里、明日十五乃歸住吉	替者城菊至	
4・5	宗住来宿：宗住及住吉大明神々託之事、銘肝而感焉		
4・7	宗住至宿	城菊至、話而去	
4・8	宗住日（干魃の予兆）：住云、：晚泊、云、（和歌二首）：宗住云（阿古屋の松）：宗住宿		
4・10	宗住至、入浴宿		
4・11	宗住早日歸于住吉		城三至宿
4・12			城三来談平家琵琶、共不妙、只朴直而已矣、去年今日城三歸去之日也、城三宿于朝上主寮
4・13		（城菊の弟子が城菊の病気を報告）	城三来話
4・14		（城菊の弟子替者が城菊の快癒を報告）	城三辞去
5・24	晚宗住至		弥一又至
8・2	宗住至、話及曆之中段		
9・3	宗住至、飲		
9・4	宗住至、乞染質、付二百文		
9・8	宗住著新衣至、住話云（藤原広嗣、玄昉）		
9・16		城菊頃在紀之由良、今日至（由良興国寺創建、孤峰覚明、古劍智訓、和歌、大雄寺中興）	
9・18			
9・20	晚宗住与廣翁同至		
9・26	宗住至、喫放参、住日（灸の効能）		

7・9	6・22	6・19	6・18	6・17	6・8	6・5	6・4		5・13	*5・5	5・5	5・1	4・27	4・14	4・13	4・1	3・16	3・11	2・9	1・19	1・17	1・13	文明18年	11・25	11・10	11・9	11・1	10・18	10・16
宗住至、子西云	話之、宗住赴放参之約於村中 (猫児三ヶ日不知寒の意味) 宗住説之、	宗住至 (將軍拝賀の属従車、足利家の没落) 宗住	(重盛宋に金を送る)	禪穩居士与宗住伴而至、住演史者二句、本居士至有興味	禪本二老居士并宗住至、禪穩提小壺小酌、閑談頗	則以之告子西云	此日宗住・子西同席話				の祖先頼実、頼実住吉の奇瑞) 宗住帰北里	宗住手公武大体略記一卷而至 (土岐氏等、土岐氏小野宮、九条殿)	宗住云、(兄弟左右大將の先例、承平の乱 太平記、	宗住至、喫淡飯	宗住至、返篆韵 (年齢の数え方、改元と天皇の交代、閑院・花山・久我三家)	宗住至、返篆韵 (年齢の数え方、改元と天皇の交代、閑院・花山・久我三家)								城菊勾当至、平日昧于日本之事、每菊来問而仮名記之 (平家物語、高倉帝、皇統、保元乱以降の世の流れ)	城菊至、食放参而去 (平家物語、マキノ遠江守、夢見、後土御門までの皇統)			宗住至	宗住至
替者城菊至云々								城菊勾当至 (大織冠北家断絶)	城菊勾当至、明日十四、入京師、繼将往能登之国、帰郷宜為来八月、謁太守介子晴雲云々 (藤氏系図) 勾当之 (藤家十九代図) 右勾当説之	城菊勾当至、(大織冠北家断絶)	城菊勾当至、(大織冠北家断絶、基実・基通と清盛)				城菊自京師而帰、位登五度之勾当云、此日来訪	城菊至、談云、(大將拝賀、官位官職等の先例、保元・平治、源平、足利將軍、北条時頼、曰野家、外戚、実朝和歌の評価)				城菊勾当至、喫淡飯、々後、頗有益	替者城菊至、喫淡飯、々後、頗有益	今朝招城菊而飯、辞而不来	城菊勾当至、明日十日、入京師云、今月十六、替師石塔之会云					城菊至、予問 (仮名遣い、無同字の和歌の流布)	群一座頭至、与一飯
																	小替者至、与小飯 (北条時政の系譜、楠正成、三木一草、禅心記の未来記)						史云	替史弥一至、夜弥一演	弥一飯、弥一宿于願本寺				

7・10	(大極殿の沿革、律令格式、承平天慶乱、和歌)	
7・13	以上宗住話	
7・24	宗住至、唐衣装ヲキテ来、似合タリ(曲舞、二十四節)宗住云、午後一時衆赴向上之水陸云々	弥一警者至、食放参、北国之事説之
7・26		前夜弥一語云(出身、父)、弥一不魚肉、不女色、弥一至快談
8・1		総警人清一至
8・2		弥一座頭、是日赴泉之海蔵
8・3		赴円光忌於向上庵、清一座頭随焉、清一归来、演史
8・4	宗住至、演史、長安建都、四神相応、將軍塚云	警者赴東濃
8・18	宗住至、演史在末	此日警者入京師
9・3	宗住至	
9・8	宗住至飯、(当世人の俗談)	
9・9	(漢字の読み)宗住言之	
9・12		(和歌四首、上杉氏、富樫氏)城菊勾当近日
9・23		歸自能州、即時問予、話移時、右之山家鳥以下、皆菊所話紀之、
9・24		勾当曰、山名次郎殿入京、騎馬七十余人云々
10・4		城菊勾当至、説云(弘法大師、橘諸兄)時城菊至、件々談論、慰予灸苦、而演史者一句、
10・5		平氏入道弘法修嚴嶋之处
10・10	宗住至云(訓読みしない名前、和歌、語集)	
10・20		勾当城菊至、不放参而去、
11・25		午後城菊勾当至、話移時、晚炊辞而不食(覺鏝、保元物語)
12・20		城菊勾当至

※源氏の作成した三種の表(「いくさ語りと禅僧」『庶軒日録』を通じて)を下敷きに作成。

() は当該の琵琶法師によって語られる内容、() は語り手が不明の場合。

* は紙背。書き損じとされる箇所。